

Kiyoteru Versus Salvador

— 花田清輝におけるサルバドール・ダリ受容についての覚書、
あるいは「マテリアリストであるとはいかなることか？」 —

山田英生

Introduction. 清輝とサルバドールへ、あるいはシュルレアリスムの受容史のために

本邦におけるシュルレアリスム受容のさまざま斜面^{ヴェルサン}とさまざまなヴァージョン^{ヴェルシオン}とが、それほど詳細な仕方で語られたことはいまだなく、私たちはいままさに、精確なその地勢図も把握しないままに、それぞれに異なった経緯度と内包を伴った斜面^{ヴェルサン}あるいはヴァージョン^{ヴェルシオン}に巻きこまれながら、シュルレアリスムについて語ることを余儀なくされている。

ムーブメントの震源であるフランスから1万キロ以上にも遠い本邦において、シュルレアリスムがこれほどまでに多数多様なディスクールを産みだしたことは、むしろ輝かしい成果ではある。しかし、同時に私たちは、自己自身の位置しているその足もとの斜面^{ヴェルサン}の傾度をあまりよく計測しえず、自己自身の生産しているヴァージョン^{ヴェルシオン}の内包を相対的に測定する術をもたないがゆえに、語りの饒舌さに反比例して対話の貧困を抱えこむことになる。

言い換えるのなら、誰もがシュルレアリスムについてそれぞれの仕方で語りうるがゆえに／しかし、誰もが互いの語りを——それぞれがあまりにも異なるがゆえに——うまく聴きとることができないという奇妙な状況が、私たちの立つ歴史的な位置である。

本邦において展開するシュルレアリスムについての、あまりにも多数多様なディスクールの地勢図を、いまこの場で完全な仕方で描きだすことはできないが、さしあたりの要約を試みるのであれば、以下ようになる。

澁澤龍彦や由良君美から開始して、四方田犬彦や高山宏を経て現在にいたるひとつの斜面^{ヴェルサン}があり（この斜面は山尾悠子の実作をも導出した）、その近傍には巖谷國士の姿がある。おそらくこの斜面^{ヴェルサン}から生産されるヴァージョン^{ヴェルシオン}を、本邦において幻想文学化、あるいはマニエリスム化されたシュルレアリスムとある程度までは呼ぶことができるだろう。その反対側には、アントナン・アルトーやジャック・ヴァシェのような詩人たちを崇敬する相対的に少数の誰か、例えば原智広のような誰かがいまそこに立っている斜面^{ヴェルサン}があり、彼ら彼女らのヴァージョン^{ヴェルシオン}はブルトンをシュルレアリスムの墮落とさえみなすようなラディカルな形態をとる。

シュルレアリスム研究と呼ばれる斜面^{ヴェルサン}もまた、この地勢図のなかに書きこまれなければならない。ジャクリーヌ・シュニウー＝ジャンドロンによって起点を置かれた、言語論的なプロブレマ

テイクを重要視するこの^{ヴェルサン}斜面は、本邦において広大な領域を組織した。鈴木雅雄、齋藤哲也、永井敦子から中田健太郎にまでいたこの^{ヴェルサン}斜面は、澁澤龍彦から始まるあの^{ヴェルサン}斜面とはそれなり以上に距離をとりながら、独特な^{ヴェルサン}ヴァージョン、言うなれば非文学化された、言語の実験（もしくは、体験、と言うべきなのだろうか？）としてのシュルレアリスムを生産しつづけている。

その他、本邦におけるシュルレアリスム受容の様々なる^{ヴェルサン}斜面と^{ヴェルサン}ヴァージョンは、いくつもの描線とその濃淡を伴いながら、複雑極まりない地勢図を織りなしている。安部公房においてカフカの不条理と接近するシュルレアリスム、バタイユを経由して岡本太郎の太陽の塔を建設したシュルレアリスム、島尾敏雄のエクリチュールにその影を落とす神経症的なシュルレアリスム……。

状況の把握はここで停止されるが、私たちの問題設定を理解するには必要十分なものだろう。私たちの目的は、あまりにも散逸的な、本邦におけるシュルレアリスム受容の地勢図を、概略的な仕方に留まるとしても捉えかえすことであり、その効果として、互いの交通を失いつつある^{ヴェルサン}斜面と^{ヴェルサン}ヴァージョンとのあいだに紐帯を組織しなおし、新たなディスクールの発明を可能にする条件を造り出すことである。

そのためにまずはじめに、私たちが試みるのは、本邦において忘れられた、と言いうるようなひとつの^{ヴェルサン}斜面と^{ヴェルサン}ヴァージョンについての探求である。花田清輝とサルバドール・ダリの遭遇という、本邦におけるシュルレアリスム受容史におけるひとつの魅惑的なクリティカル・ポイントを、私たちはいまいちど語りなおすだろう。「マテリアリストであるとはいかなることか？」というひとつの問いが、清輝とサルバドールの邂逅に取り憑いているのだとして、その再来^{ルヴェナン}霊が私たちに与える効果とは、果たしていかなるものであるだろうか。

1. Entre Kiyoteru et Salvador、あるいは転轍する瀧口修造

実のところ、私たちが焦点化しようとしているこのクリティカル・ポイント、花田清輝とサルバドール・ダリとの邂逅は、明確かつ具体的な仕方で詳述される機会にあまり恵まれてこなかった。花田清輝についての数少ない作家論のうち、代表的なものとされる桂秀実による『花田清輝 砂のペルソナ』においても、花田におけるシュルレアリスムに関するディスクールの受容はそれほどよく記述されているとは言い難い⁽¹⁾。藤井貴志の2015年の論文は辛うじて、この点に関して触れえているが⁽²⁾、彼が主題化するのはあくまでも安部公房による小説にダリの翻訳・紹介や絵画的イメージが与え得たと推測される影響なのであり、花田とダリのあいだで取り交わされたディスクールの流通をそれほど詳細に記述するには至っていない。

これらの状況を踏まえれば、花田がダリのテキストをいつ、どのようにして受容しえたのかを追跡的に記述することが、まずはじめに私たちに要請される作業となるだろう。

いつか岡本太郎は、林檎のなかにイデオロギーがはいっているかどうかという或る画家の素朴きわまる質問にたいして、イデオロギーはともかく、そのなかに種のはいっていることだけはたしかであると、これまた、あまりにも素朴きわまる答弁を試みていたが、むろん、林檎にはさまざまな種類があり、この天地のあいだには、種なし林檎というやつもまた、無数に存在しており、たとえばセザンヌの林檎などは、ダリのいみじくも喝破した通り、いささかもわれわれの食欲をそそらない、反エピキュル的な幾何学的図形の一つに過ぎず、抽象化不足のため、自然の残滓をとどめ、辛うじて林檎らしい恰好を保っているとはいえ、そのなかに、種のはいっていないことだけはたしかであろう。もっとも、ダリの推奨するラファエル前派の林檎にしても、当のダリ自身の林檎にしても、ダリ流に言うならば、「物理的重力によって裏づけられた超物質的林檎」にほかならず、セザンヌの林檎と同様、そのなかに種がはいっているかどうか、あやしいものである。

(花田清輝《林檎に関する一考察》)⁽³⁾

この一節は、『人間』1950年9月号に掲載され、1954年1月に未来社より刊行された評論集、『ヴァンギャルド芸術』に収録された、花田の《林檎に関する一考察》と題されたテキストの冒頭である。ここにおいて、ダリとダリの林檎というモチーフが花田のテキストのなかに唐突に書きこまれるのだが、この事態を準備したものとは何だろうか。

私たちは久保覚の手になる花田清輝についての年譜の1938年の項に、「九月に『三笠全書』の一冊として刊行された瀧口修造の『近代芸術』を愛読。この年の前後から、アンドレ・ブルトンの『宣言』や *Légitime Défense* をはじめとするシュルレアリスム関係の文献を読みはじめる」との記述を確認することができるが⁽⁴⁾、瀧口修造によって1938年に刊行された『近代芸術』には、以下の一節を見いだすことができる。

彼【引用者注：ダリ】は、セザンヌの「林檎」は、反エピキュル的な、プラトニックな愛の対象にすぎず、従つて「食欲を催さない」林檎でしかないが、肉感的なラファエル前派の描いた林檎こそ、物理的重力に裏づけられた「超物質的」な林檎であるといふ。彼に於いて、シュルレアリスムと抽象主義とは完全に對蹠的となつてゐる。物理學的な傳説に一役を買った林檎が、近代繪畫の祖セザンヌにも大きな役割を持ったことは奇妙な一致であるが、再びダリが人類の感覺の曙光に照らされたアダムとイヴの林檎傳説を想起させたことは偶然ではあるまい。

(瀧口修造『近代芸術』)⁽⁵⁾

「反エピキュ(ウ)ル的な」、「ラファエル前派の(描いた)林檎」、あるいは「物理的重力に(よつて)裏づけられた超物質的林檎」などの用語法のレベルで、花田がレファレンスを示すこともなく瀧口の記述を踏襲していることは明瞭に見てとることができるだろう。剽窃的ときえ言えるほどさりげない花田の引用の手つきには苦笑するほかないが、これらの語の一致が私たちの最初の手がかりとなる。

では、瀧口のダリについての記述の典拠はどこにあるだろうか。瀧口もまた、『近代芸術』の該

当箇所についてはレファレンスを示していない。瀧口によるその他の引用箇所には詳細な注が付けられていることから、おそらくは注の振り忘れと推測される（なお、この忘却は1948年以降の『近代藝術』の再刊においても修正されていない）が、私たちはサルバドール・ダリのテキストのなかから、《ラファエル前派的永遠に女性なるもののスペクトル的なシュルレアリスム *Le surréalisme spectral de l'éternel féminin préraphaélite*》を発見することができる。

(.....) Ces gens sans appétit crurent que, précisément, c'était dans la simplicité de cette attitude antiépicurienne que résidaient tout le mérite et tout la santé esthétique de l'esprit. Ils crurent aussi que la pomme de Cézanne avait le même poids que la pomme de Newton et encore une fois ils se trompèrent lourdement, car, en réalité, la gravité de la pomme de Newton réside par excellence dans le poids des pommes d'Adam des cous courbes, physique et moraux, de préraphaélisme. C'est pourquoi, si l'on crut à tort que l'aspect cubique de Cézanne représentait une tendance matérialiste consistant en quelque sorte à faire toucher de pied ferme l'inspiration et le lyrisme, nous voyons maintenant qu'il ne fit que le contraire : (.....)

(.....) il est donc naturel que, lorsque Salvador Dali parle de ses découvertes paranoïaque-critiques au sujet du phénomène pictural, les contemplateurs platoniciens de l'éternelle pomme de Cézanne ne veuillent pas prendre trop au sérieux cette espèce de frénésie qui consiste à vouloir tout toucher avec les main (même l'immaculée conception de leur pomme), pis encore, à tout vouloir réellement manger et mastiquer d'une façon ou d'une autre. Mais Salvador Dali n'a pas fini d'insister sur ce côté hypermatérialiste, primordial à tout procès de la connaissance, de la biologie liée à la chair et aux os de l'esthétique (.....)

(.....) 食欲のない人々が信じたところによると、正確には、この精神の美学的なあらゆる長所とあらゆる健康とは、まさにこうした反エピキュリアンの【引用者注：反エピキュウルの】な態度の単純さに存していたのだ。彼らはまた、セザンヌの林檎はニュートンの林檎とおなじ重さをもっていたとも信じているのであり、またしてもひどい間違いを犯したのだ。というのも、実際には、ニュートンの林檎の重力は、とりわけ、ラファエル前派の、身体的かつ精神的な、湾曲した首のアダムの林檎の重さに存するからだ。それゆえ人々が、セザンヌの立方体的側面が、インスピレーションと抒情とに、いわば敢然と触れさせることに存する唯物論的傾向を表していたのだと誤って信じたのであれば、いまや私たちは、セザンヌは反対のことをしか為しはしなかったことを理解するのだ。(.....)

(.....) それゆえ、サルバドール・ダリが絵画的現象に関する彼のパラノイア的＝批判的発見について語る時、セザンヌの永遠的林檎のプラトニックな瞑想家たちが、すべてに（彼らの林檎の処女懐胎にさえ）手で触れることを望むこと、さらに悪いことには、すべてを、一方の方法や他方の方法によって現実に食べた咀嚼することを望むことに存するある種の熱狂を、真に受け過ぎることを望まないのは、当然のことである。しかしサルバドール・ダリは、認識の、すなわち美学の肉と骨とに結びついた生物学の、あらゆる係争において第一義的な、超唯物論的【引用者注：超物質的】な側面を、強調することをやめはしなかったのだ。

(Salvador Dali, *Le surréalisme spectral de l'éternel féminin préraphaélite*)⁽⁶⁾

このテキストには、既に引用した瀧口の記述に登場する、例えば「プラトニックな」という形容や、「アダムとイヴの林檎傳説」といったモチーフ、あるいは先に触れた花田にまで引き継がれる訳語の参照元と思われる語（引用中に注釈で示している）がほぼすべて見いだされる。1936年6月に『ミノトール』8号に掲載されたこのテキストをレファレンスとして、瀧口は『近代藝術』の該当箇所を記述したにちがいない。

あるいはまた、1937年1月に刊行された、『École de Tokyo』第1巻第2号に、『ラファエル前派に現れた永遠の女性の亡霊的シュルレアリズム』と題されたダリの当該テキストの瀧口による翻訳が掲載されていることにも注目しなければならない。瀧口はこの翻訳において、ダリの「lignes géodésiques」という用語に、「最短線 géodésiques」という訳語を、フランス語のスペルを並記しつつ割り当てているのだが⁽⁷⁾、花田の《林檎に関する一考察》においても、「最短線^{ジオデシック}」というルビを振られた語が見いだされる⁽⁸⁾——例によって花田はまったくレファレンスを示していないが——ことから、花田が『近代藝術』の記述と同時に、瀧口によるダリのテキストの翻訳を参照していたことは実証できるだろう。

ここにおいて私たちは、花田によるサルバドール・ダリ受容において、瀧口修造が果たした役割の重要性を確証しうるわけだが、この「林檎」のモチーフの他に、花田がダリのテキストからより明瞭な仕方でも引用を試みている箇所についても、その経路を突き止めてみよう。

1950年12月に塙書房より刊行された『文学読本』鑑賞篇に《西欧近代小説》のタイトルで掲載され、後に、『アヴァンギャルド芸術』に《鏡の国の風景》とタイトルを変更して収録された花田のテキストには、1935年のダリのテキスト、《非合理の征服 *La conquête de l'irrationnel*》が引用されている。

（……）ダリは、かれの『非合理の征服』のなかで、抽象派の作品を、今日の知的懊悩からみれば、いかにも甘ったるいものとして、おのれの心境を、大凡、次のように告白している。

絵画的な領域におけるわたしの野心は、すべて具体的な非合理性の影像を、もっとも熾烈厳格な精密さをもって物質化することにある。想像的な精密さをもって物質化することにある。想像的な、あるいは、具体的な非合理性の世界は、現象的な現実の外的世界にくらべて決して劣らない客観的な証明力と、密度と、継続性ともつのみならず、同じ強さの説得力、認識力、伝達力をもつものである。重要なことは、非合理的な具象性の主題を伝達することであって、絵画上の様々な手段が、この主題のために使用されるのである。——具象的な非合理性の影像が、現象的な現実に接近し、あるいは、それに応ずる表現手段が、偉大なリアリストたち——ヴェラスケスやウエルメエル・ド・デルフト等のそれに近づくことである。

（花田清輝《鏡の国の風景》⁽⁹⁾）

この引用部分の典拠を、私たちはやはり、瀧口修造の仕事のなかに求めることができる。『みづゑ』1936年6月号の目次には、瀧口の《サルウアドル・ダリと非合理性の繪畫》と題されたテキストを見いだすことができるのだが、この記事のなかには、《非合理の征服》の抄訳が掲載されているからだ。

繪畫的な領野に於ける僕の野心は、凡て具體的な、非合理性の影像を、最も熾烈厳格な精密さをもって表出 materializer【引用者注：アクサン記号の欠如は原文ママ】することにある。想像的な、或は具體的な非合理の世界は、現象的現實の外的世界に比較しても、決して劣らぬ客觀的な明證と、密度と、繼續性を持つのみならず、同等の説服、認識、傳達の力強さを持つものである。重要なのは、非合理的な具象性の主題を傳達せんとすることであつて、繪畫的表現の様々な手段が、この主題のために使用されるのである。卑劣極まる野心に満ちた模倣藝術のイリュージョニズム、麻痺性の、見かけ倒しの巧妙なレトリック、極めて細微に互って叙述風の、既に信用を失墜したアカデミズム等も、具象的な非合理性の、新しい精密さに接近することによつて、思想の高い段階に到達しうるのである。即ち具象的な非合理性の影像が、現象的現實に接近し、或はそれに應ずる表現手段が偉大なるレアリストの畫家たち——ウエラスケスやウエルメエル・ド・デルフトなど——のそれに近づくことであり、未知の想像と、非合理的な思想とに従つて描くことである。

(瀧口修造《サルウアドル・ダリと非合理性の繪畫》)⁽¹⁰⁾

驚くべきことに、花田と瀧口の用いている訳語を対照するとき、私たちは花田が瀧口の訳語を書き換え、一部（引用中下線部）を省略しさえしていることに気づく。前掲した藤井貴志による論文においても、この瀧口を経由した花田における《非合理の征服》の受容は言及されているが、しかし、藤井の記述にあるように、「花田が瀧口訳を参照した痕跡は明らかである」ことは確からしいとはいえ、これを「若干の語句の変更を施したものに過ぎ」ないものと考えることには多少の困難が伴うだろう。⁽¹¹⁾

これら《ラファエル前派的永遠に女性なるもののスペクトル的なシュルレアリスム》と、《非合理の征服》の流通経路の特定をもって、私たちはサルバドール・ダリから瀧口修造を経て花田清輝へ、という、本邦におけるシュルレアリスム受容の重要な一部分を跡づけえたわけだが、さてしかし、ひとつ、私たちが注目しなければならない花田による訳語の書き換えが残されている。それは瀧口が「表出 materializer」とフランス語のスペルを示しながら用いている訳語の、花田による「物質化」という訳語への書き換えである。さらにはここで花田清輝は、驚くべきことに、「想像的な精密さをもって物質化することにある」という、瀧口の翻訳にもダリの原文にも見当たらない一文を書き加えてしまっているのだが、これはいかなることだろうか。⁽¹²⁾

おそらくこの書き換えと書き加えは、花田清輝という批評家にとって、サルバドール・ダリと対峙するうえで、この「matérialiser」という一語が途方もなく重要な意味を持ちえたことを示しているだろう。マテリアルなもの、唯物論的であること、マテリアリストであるということ。これ

らのプロブレマティークをめぐって、サルバドール・ダリと花田清輝は対決する。⁽¹³⁾

2. Kiyoteru Versus Salvador、あるいは「マテリアリストであるとはいかなることか？」

花田清輝によるサルバドール・ダリへの批判的言及は、《マザーグース・メロディー》、《林檎に関する一考察》、《鏡の国の風景》、《機械と薔薇》において連続的に展開されるのだが、これらの小論の初出時期は、それぞれ1950年8月、1950年9月、1950年12月、1951年1月と、ほぼ一年以内の短い期間に集中している。これらのテキストはすべて、後に『アヴァンギャルド芸術』に収録されるのだが、ダリに対する花田による批判はほぼ一貫して、「内部」から「外部」へと視線を向け変えよ、とダリに呼びかけている。これはいかなることか。

とはいえ、いったい、あるがままの林檎とは、いかなるものであろう。一定の色、匂い、形および固さの相合するのが観察されると、ひとつの特殊な物体と考えられ、そういう観念の集合にむかっただけの林檎という名称があたえられる、とジョージ・バークリーはいう。このばあい、「観念の集合」が、イデオロギーではなく、感覚の集合を意味することはあきらかである。もしもそうだとすれば、内部の世界を、即物的に外部の世界をとらえることによって表現しようとするダリの方法と、感覚の集合をもって唯一無二の实在とみなす、典型的な観念論者であるバークリーの方法とのあいだに、そもそもどれほどの相違があろう。つまるところ、観念論者とは、林檎のなかからイデオロギーを発見するような人間ではなく、林檎の感覚を林檎そのものと思ひこみ、われわれの主観から独立した、林檎という物体の客観的存在を、いささかも認めないような人間を指すらしい。内部の世界と外部の世界とのあいだには断絶があり、それらの二つの世界を媒介するものが、実践以外にないことはいまでもない。しかるに、セザンヌの理知的な林檎に不満を抱くダリは、おのれの夢みている本能的な林檎のみずみずしい姿を、無造作に、あるがままの林檎のすがたにみいだすのだ。たしかに、かれは、内部の世界と外部の世界とのあいだの断絶を意識していない。いや、むしろ、断絶を意識しないほど、おのれの夢に憑かれることを愛している。しかし、それならば、どうしてかれは、逆に、あるがままの林檎のすがたを、本能的な林檎のすがたでとらえようとしないのであろう。前者のほうが、後者よりも、かれにとっては、はるかにとらえがたいはずではないか。

(花田清輝《林檎に関する一考察》)⁽¹⁴⁾

つまりこういうことだ。《ラファエル前派的永遠に女性なるもののスペクトル的なシュルレアリスム》のダリは、セザンヌの描く林檎への批判を梃に、先に引用したように、「すべてに（彼らの林檎の処女懐胎にさえ）手で触れることを望むこと、さらに悪いことには、すべてを、一方の方法や他方の方法によって現実に食べまた咀嚼することを望むことに存するある種の熱狂 (cette espèce de frénésie qui consiste à vouloir tout toucher avec les main (même l'immaculée conception de leur pomme), pis encore, à tout vouloir réellement manger et mastiquer d'une façon ou d'une autre)」⁽¹⁵⁾を強

調しつつ、「インスピレーションと抒情とに、いわば敢然と触れさせることに存する唯物論的傾向 (une tendance matérialiste consistant en quelque sorte à faire toucher de pied ferme l'inspiration et le lyrisme)」⁽¹⁶⁾ もしくは「認識の、すなわち美学の肉と骨とに結びついた生物学の、あらゆる係争において第一義的な、超唯物論的な側面 (ce côté hypermatérialiste, primordial à tout procès de la connaissance, de la biologie liée à la chair et aux os de l'esthétique)」⁽¹⁷⁾ を主張するのだが、花田清輝によれば、これは唯物論的に不十分な手続きである。

言い換えるのであればこういうことだ。《ラファエル前派的永遠に女性なるもののスペクトル的なシュルレアリスム》のダリにとって、マテリアルなものであることの条件とは、ともかくその対象を欲望に巻きこむことが可能であること（触れられること、食べられること）なのだが、花田によればダリのこの前提は、「感覚の集合」を条件に「実在」を定義する「観念論者」パークリーとさほど異なっていないのだし、「林檎という物体の客観的存在」、マテリアルな林檎そのものをいささかも捉え得ていない。マテリアリストであるためには、「内部の世界と外部の世界とのあいだの断絶」を意識していなければならぬのだから、欲望の備給を即座に対象のマテリアルな実在と取り違えてはならないのだ。

では、花田の提案するマテリアリストであること、「あるがままの林檎」と遭遇することの条件とは何だろうか。《林檎に関する一考察》の彼に従えば、それは、「自然主義へ帰」ることではなく、「内部の世界と外部の世界との関係を、その差別性と統一性においてとらえた上で、これまで内部の現実を形象化するためにつかわれてきた、アヴァンギャルド芸術の方法を、外部の現実を形象化するために、あらためてとりあげる」ことである⁽¹⁸⁾。あるいは、《マザーグース・メロディー》の花田によれば、「超現実主義者」のダリは、内部の現実を、外部の現実によって置きかえ、精密に表現しようとした。本当の悪人は、その逆をゆくだけのことだ⁽¹⁹⁾。

このとき花田は、あまりにも教条的なマルキスト、芸術的前衛にナイーブな現実への回帰を対置してしまう誰かとして振るまってしまう危険を犯しながら、それとは何か別のことを言おうとしているのではないだろうか。つまり、自然主義者の眼に映るような現実を、パラノイア者の眼に映るような——ダリのタブローに描かれているように、馬と女性の身体とライオンとがひとつの形態のなかで重なりあい、時計がチーズのように溶けてしまうような——現実によって書き換えてしまうことの可能性を、彼は指し示しているように見える。

ドレムミイの空の声からルウアンの日の柱に至るまで、ジャンヌはまさしく、選ばれたる女性であり、それ故にこそ人類の歴史は美しいのだ。——とは石川淳の『普賢』のなかにあるジャンヌ・ダルクに関する一節だが、わたしは、政治家のアヴァンギャルドについて考えるとき、しばしば、右の一節を思いだす。ジャンヌは、つまらない田舎娘であり、子供らしい魂と、原始人のような肉体をもち、それこそダリのように、ともすればパラノイアのようなまなざしで、始終、おのれの無意識の世界ばかりのぞきこんでいたかもしれない。おそらく林檎の的が、眼をそらすキッカケをあたえるまで、

ウィルヘルム・テルにしても、同じ状態であっただろう。彼らは、選ばれた人間であるかもしれないが——しかし、天才でもなければ、狂人でもなく、平凡な人民の一人であり、内部の世界の奇怪きわまる風景をみなれた眼を、なにかの拍子に外部の世界に転じ、人民の指導者たちの途方にくれている非常事態を、自明の事実として、きわめて即物的にとらえ、そのさい、人民ならば、当然うつであらう手を、あっさり、うっただけのことであろう。

(花田清輝《林檎に関する一考察》)⁽²⁰⁾

《林檎に関する一考察》の花田清輝にとり、「ジャンヌ・ダルク」や「ウィルヘルム・テル」のような革命家、すなわち究極のマテリアリストの眼とは、パラノイア者、サルバドール・ダリの眼と等価なのであり、問題になるのはその眼の向けられた方向に過ぎない。このとき私たちは、花田における「即物的」という語の意味を一度、日常的な意味から引き離さなければならないのではないだろうか。「即物的」に現実を捉えることとは、花田にとり、常人の眼には視えないものを視ることと紙一重でさえある。

あるいはまた、《鏡の国の風景》や《機械と薔薇》の花田は、マルクスの『経済学批判』を援用しながら、「具体的なものは、直観と観念との出発点であるとはいえ、思考上では、包括の過程として、結果としてあらわれ、決して出発点としてはあらわれない」とのテーゼを繰り返すのだが⁽²¹⁾⁽²²⁾、花田によるこのあまりにも基本的な仕方では弁証法的なテーゼは、彼が《非合理の征服》のダリに差し向けた批判を経由して理解されなければならない。

《鏡の国の風景》の花田によれば、モンドリアンのような「抽象派」に対して、「想像的な、あるいは、具体的な非合理性の世界 (le monde imaginaire et de l'irrationalité concrète)」の「現象的現実性の外的世界のそれと同じ、客観的な明白さ、確実性、硬度と、説得的で、認識的かつ伝達可能な厚み (de la même évidence objective, de la même consistance, de la même dureté, de la même épaisseur persuasive, cognitive et communicable, que celle du monde extérieur de la réalité phénoménique)」⁽²³⁾を強調するダリは、空を仰ぎながら宇宙についての思索に耽るあまり、足もとの穴に落ちたタレースを笑うトラキアの女である。抽象的な瞑想に耽る哲学者に対して、即物的な物質の実在性を知悉していることを自認するトラキアの女＝ダリはしかし、——彼の論理を転倒すれば——なぜ「外部の世界」に、「客観的な証明力と、密度と、継続性と、説得力と、認識力と、伝達力」とがあるのだと信じてしまうのだろうかと花田は問う。むしろこう考えてみるべきだ。「内部の世界と同様、外部の世界もまた、ダリのみたような具象的な非合理性の映像で溢れており、現在、われわれは、その物質のもつ非合理的な側面を、ダリにならなければならないならば、もっとも熾烈厳格な精密さをもって、精神化する段階に立っているのではあるまいか」。⁽²⁴⁾

自身の書き換えかつ書き加えた「物質化」=「matérialiser」という訳語を足場にしてアンチテーゼを措定し、弁証法を起動する花田の鮮やかな手際の美しさにはまさしく驚嘆せざるをえないが、要するにこういうことだ。「具体的なものは、直観と観念との出発点であるとはいえ、思考上では、包括の過程として、結果としてあらわれ、決して出発点としてはあらわれない」以上、最終的に

把握されるはずの具体的かつ即物的なマテリアルとは、いちどは直観的に認識された合理的な現実とは別の、認識の初めの地点から見れば非合理とさえ思われるような相貌をまとわなければならない。それは場合によっては、「精神化」されてしまった現実と見紛うほどの異様な様相——「馬と女性の身体とライオンとがひとつの形態のなかで重なりあい、時計がチーズのように溶けてしまうような」様相——をさえ呈するはずだ。

《マザーグース・メロディー》における花田清輝の、「無意識の世界も、物質の世界も、いずれもナンセンスではあろうが——しかし、本当の悪人にとっては、悪事をはたらくということが第一義であり、行動の世界から遊離した無意識の世界よりも、それと密接なつながりをもつ物質の世界のほうが、はるかにナンセンスにみえるだけのことだ」⁽²⁵⁾との言明もまた、この意味において理解されなければならないだろう。悪人すなわち革命家、言い換えればマテリアリストの眼には、「物質の世界」すなわち現実が、意味の秩序において整合的な合理性ではなく、ナンセンスな非合理性のもとに立ち現れなければならない。

サルバドール・ダリと対決する花田清輝において、マテリアリストであることとは、感覚もしくは直観される現実なるものに従うことではなく、「実践」もしくは「行動」において——この語の選択に、花田における毛沢東の影響を垣間見ることもあるいは可能であるのかもしれないが——幾何学的な合理性を伴った表象として現れた現実を解体し、ナンセンスな「具体的な非合理性 (l'irrationalité concrète)」の横溢する現実を夢見る²ことであるにちがいない。

Conclusion. Kiyoteru & Salvador,

あるいはシュルレアリスムのマテリアリズムに賭けられた可能性について

私たちはここまでで、花田清輝におけるサルバドール・ダリ受容を跡づけかつ、花田によるダリ批判を読解することを試みてきたわけだが、この作業から析出されたものに期待しうる効果とは何だろうか。

ひとつには、先に挙げた桂秀実による『花田清輝 砂のペルソナ』以降、それほど精細な仕方で論じられてきたとは言い難い花田清輝という批評家についての新たな理解を提出することが予期されうるはずである。桂の論述もまた、花田によるマルクス『経済学批判』における弁証法的手続きの援用を焦点化しており、抽象的あるいは超越的真理を解体するその性格を指摘しているが⁽²⁶⁾、花田に特殊的な「対立物を対立のまま統一する」この弁証法の成立過程において、シュルレアリスムの果したと思われる役割を記述しえてはいない。

私たちが本稿において記述してきたように、花田清輝におけるサルバドール・ダリ受容は、花田の思考においてそれなり以上に重要な役割を果たしているわけだが、このことを踏まえながら、この批評家の思考の形成過程をいまいちど記述しなおすことも可能であるにちがいない。あるい

は、ダリを批判しながら導出されていく花田のマテリアリストとしての思考が、どこか1930年代のブルトンのそれに漸近してしまっているようにも見えることも、今後、この視座から可能になるはずの有意な研究課題を準備するだろう。

あるいはまた、サルバドール・ダリがある時期、1930年代に展開したディスクールを、多少のタイムラグを置いた50年代における花田清輝による邂逅という地点から捉えかえすことに、30年代シュルレアリスムにおけるマテリアリズムの問題を、いまいちど重要なプロブレマティークとして思考しなおす可能性を期待することもできるだろう。

例えばパオロ・スコベリッティは、ダリの1930年のテキスト、《腐ったロバ *L'Âne pourri*》に言及しながら、「スキゾフレニーによる現実の解体という未来のプログラムは、かくして、早くも「パラノイア的-批判的の革命」のプロジェクトを素描した最初のテキストから告知されていた」(*Le futur programme de désagrégation du réel par la schizophrénie se trouvait ainsi annoncé dès le premier texte esquissant le projet d'une « révolution paranoïaque-critique ».*)⁽²⁷⁾ のだとして、ダリの位置していたシュルレアリスムにおけるパラノイアの圏域をスキゾフレニーの準備段階に位置づけるのだが、花田を経由することで可視化されるシュルレアリスム的なマテリアリズムは、あくまでもスキゾフレニーをモデルとした、「欲望する諸機械 *Les machines désirantes*」の多元的経済論を想定するドゥルーズ＝ガタリのマテリアリズムと何か決定的に隔たった形態をとるのではないだろうか。おそらくそのとき問題になるのは、ダリの用いる「パラノイア的 *paranoïaque*」という形容よりもむしろ、「弁証法的 *dialectique*」という語に導かれるブルトンの思考であるはずだが、この視座もまた、さらなる探求を用意しうるだろう。

さて本稿はここにおいて論を閉じる。サルバドール・ダリと花田清輝についての一連の思考を終えて、私たちは今後、アンドレ・ブルトンのテキストへと向かうだろう。花田清輝の名はその際におそらく再度、私たちのディスクールのなかに登場するはずであるが、そのときにはまた本稿とは異なったプロブレマティーク——例えば、「黒いユーモア *l'humour noir*」のような——がその名に伴われるはずである。

注

- (1) 桂秀実『花田清輝 砂のペルソナ』、講談社、1982年。なお、この作家論においては、「(……)シュルレアリスムを否定的媒介にして新しいアヴァンギャルド芸術をつくといいたそれにして、今日その即自的の有効性を云々することはできないであろう」という一節が見いだされるのみで、花田におけるシュルレアリスム受容はほぼ等閑されていると言ってよい。
- (2) 藤井貴志「安部公房『壁』の中の〈ダリ〉——〈偏執狂的批判的方法〉と〈異形の身体〉表象——」、『愛知県立大学日本文化学部論集』第7号所収、愛知県立大学国語国文学科編、2015年、65-102頁を参照のこと。藤井は論文中にて、瀧口修造のダリ紹介が花田清輝を経て安部公房の小説へと流入してい

くプロセスを示唆して（上に示した論集 82 頁を参照せよ）おり、この着想に関しては本稿においてもおおいに参考としている。

- (3) 花田清輝《林檎に関する一考察》、『花田清輝全集』第 4 巻所収、講談社、1977 年、119 頁。
- (4) 久保覚《年譜》、『花田清輝全集』別巻Ⅱ所収、講談社、講談社、1980 年、144 頁。
- (5) 瀧口修造『近代藝術』、三笠書房、1938 年、100-101 頁。
- (6) Salvador Dali, *Le surréalisme spectral de l'éternel féminin préraphaélite*, Oui, Denoël, 2004, p287-288.
- (7) 瀧口修造《ラファエル前派に現れた永遠の女性の亡霊的シュルレアリズム》、『コレクション・都市モダニズム詩誌』第三巻「シュルレアリスム」所収、ゆまに書房、2009 年、786 頁。
- (8) 花田清輝、前掲書、123 頁。
- (9) 花田清輝《鏡の国の風景》、『花田清輝全集』第 4 巻所収、講談社、1977 年、160 頁。
- (10) 瀧口修造《サルウアドル・ダリと非合理性の繪畫》、『みづゑ』1936 年 6 月号所収、春鳥會、1936 年、449-450 頁。
- (11) 藤井貴志、前掲書、81-82 頁。例えばダリによる原文の「想像的な具体的非合理の世界が、現象的現実性の外的世界のそれと同じ、客観的な明白さ、確実性、硬度と、説得的で、認識的かつ伝達可能な厚みをもつように（*Que le monde imaginaire et de l'irrationalité concrète soit de la même évidence objective, de la même consistance, de la même dureté, de la même épaisseur persuasive, cognitive et communicable, que celle du monde extérieur de la réalité phénoménique*）」という箇所（Salvador Dali, *La conquête de l'irrationnel*, Oui, Denoël, 2004, p259 を参照せよ）と照らしあわせれば、「想像的な、あるいは、具体的な非合理性の世界は、現象的な現実の外的世界にくらべて決して劣らない客観的な証明力と、密度と、継続性をもつのみならず、同じ強さの説得力、認識力、伝達力をもつものである」との花田の訳語は原文とのいちおうの対応関係を保ちつつ（「*épaisseur*」を敢えて「強さ」もしくは「力」と訳すことがあるだろうか、という問題ももちろん残るとはいえ）、瀧口の「想像的な、或は具體的な非合理の世界は、現象的現実の外的世界に比較しても、決して劣らぬ客観的な明證と、密度と、継続性を持つのみならず、同等の説服、認識、傳達の力強さを持つものである」との訳語とそれなり以上に異なっていることが理解できる。このことを説得的な仕方では実証することは未だ私たちには可能ではないが、花田がダリの《非合理の征服》原文に触れており、瀧口の翻訳を原文を参照しつつ書き換えていた可能性も、おそらく強く否定することはできないだろう。
- (12) Salvador Dali, *La conquête de l'irrationnel*, Oui, Denoël, 2004, p. 259 と対照せよ。
- (13) 本稿では詳細に追跡することはなかったが、《鏡の国の風景》における花田によるブルトン&エリュアールの引用についても概要を示しておく。《鏡の国の風景》には、ブルトンとエリュアールによる《ポエジーに関するノート *Note sur la poésie*》の引用が含まれているが、ここには原文には並記されていないはずのヴァレリーのテキストも同時に訳出されている。そもそもブルトン&エリュアールのこのテキストは、『リテラチュール』に掲載されたヴァレリーのテキストを書き換えたものだが、本邦においては堀口大學が 1943 年に『思考の表裏』のタイトルで、ブルトン&エリュアールの参照元であるヴァレリーのテキストを並記しながら《ポエジーに関するノート》を翻訳している。花田が参照したのはこのヴァージョンであったことはほぼ間違いないだろう。《ポエジーに関するノート》の成立事情については、André Breton, *Œuvres complètes I*, Gallimard, 1988, p. 1757 を参照せよ。また、堀口大學による邦訳版に関しては、堀口大學『思考の表裏』、閏月社、2011 年が最も参照しやすい。
- (14) 花田清輝《林檎に関する一考察》、前掲書所収、121 頁。

- (15) Salvador Dali, *Le surréalisme spectral de l'éternel féminin préraphaélite*, *op.cit.*, 288.
- (16) Salvador Dali, *ibid.*, p. 287.
- (17) Salvador Dali, *ibid.*, p. 288.
- (18) 花田清輝、前掲書、122 頁。
- (19) 花田清輝《マザーグース・メロディー》、『花田清輝全集』第 4 卷所収、講談社、1977 年、118 頁。
- (20) 花田清輝《林檎に関する一考察》、前掲書所収、125-126 頁。
- (21) 花田清輝《鏡の国の風景》、前掲書所収、139 頁。
- (22) 花田清輝《機械と薔薇》、『花田清輝全集』第 4 卷所収、講談社、1977 年、164 頁。
- (23) Salvador Dali, *La conquête de l'irrationnel*, *op.cit.*, p. 259.
- (24) 花田清輝《鏡の国の風景》、前掲書所収、158-161 頁。
- (25) 花田清輝《マザーグース・メロディー》、前掲書所収、118 頁。
- (26) 桂秀実、前掲書、34-37 頁。
- (27) Paolo Scopelliti, *L'influence du surréalisme sur la psychanalyse*, *L'Age d'Homme*, 2002, p. 57.

